

題目：医療ソーシャルワーカーの実践過程を支える経過記録法のあり方－生活支援記録法（F-SOAIP）の導入によるアクションリサーチ

保健医療学専攻・医療福祉学分野・医療福祉学領域
学籍番号：20S3041 氏名：高石 麗理湖
研究指導教員：小嶋 章吾特任教授 副研究指導教員：小林 雅彦教授

キーワード：医療ソーシャルワーカー（MSW）、ソーシャルワーク記録、経過記録法、ソーシャルワーク実践過程、生活支援記録法（F-SOAIP）

1. 研究の背景

記録は実践の証であり、ソーシャルワークの重要な要素の一つである。しかし、ソーシャルワーク経過記録（以下、経過記録）の書き方に悩みを抱える医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）は少なくなく、ソーシャルワーク記録教育には課題がある。電子カルテシステムの導入により MSW が作成する経過記録（以下、MSW 記録）が常に多職種目の晒される環境に置かれるようになり、多職種と共有する共有記録と、MSW のみがアクセス可能な MSW 記録の二重記録化という特徴的な課題が MSW には生じている。経過記録作成の具体的な指標は「医療ソーシャルワーカー業務指針」（厚生労働省健康局発）において示されていない。

経過記録の方法（以下、経過記録法）には叙述形式と SOAP 等の項目形式がある。MSW は所属機関に合わせ SOAP を使用する場合が多いが、SOAP は問題指向型であり、ストレングス視点の MSW 実践にはなじみにくい。また、叙述形式による経過記録は、専門職の判断根拠であるアセスメントに関する記載が漏れる傾向が先行研究で指摘され続けている。一方、問題指向に限定されない生活支援記録法（以下、F-SOAIP）は、ソーシャルワーク実践過程を網羅した経過記録法であることが示唆されているが、未だ各種ある経過記録法と MSW 実践の関連性は明らかになっておらず、MSW 実践過程を支える経過記録法のあり方を明らかにする必要がある。

2. 研究目的と意義

本研究では、経過記録法の形式が MSW のソーシャルワーク実践に影響を与えることを明らかにする。そして、MSW のソーシャルワーク実践過程を支える経過記録法のあり方について明らかにする。経過記録法には各種あるが、経過記録法と MSW 実践の関係性に着目した先行研究は見当たらず、この点が本研究の新規性である。本研究により、採用する経過記録法により面接や記録時の意識に変化が生じることが明らかにされ、MSW のソーシャルワーク実践に相応しい経過記録法を示すことができる。経過記録法の形式により MSW のソーシャルワーク実践過程が支えられることは、クライアントの利益につながり、この点において本研究には意義がある。

3. 研究方法

先行研究レビュー：CiNii による「MSW and ソーシャルワーク記録」等の先行研究検索に加え、ハンドサーチにより得られた 35 本の先行研究をレビューし、MSW 記録研究の課題を整理した。

研究 1 全国調査：【①量的研究】使用する経過記録法や面接時と記録時の意識等について、自記式質問紙調査により MSW の経過記録の現状把握、及び経過記録法とソーシャルワーク実践に影響を与える要因を探索した。公益社団法人日本医療ソーシャルワーカー協会（以下、MSW 協会）のホームページ上の「会員マップ」から 1,081 箇所の「病院」が確認できたため、全国調査の対象として選定した（2021 年 7 月 18 日時点）。調査票の配布等は MSW 協会の承諾を得て会員名簿に基づき実施した（名簿使用承認第 21-01 号）。調査は 2021 年 8 月 27 日から 9 月 30 日に実施し、192 名から回答を得た（回収率 17.7%、有効回答率 91.1%）。分析方法は決定木分析を採用し、目的変数を「経過記録の統一状況」「使用する経過記録法」「記録時と面接時のアセスメントの意識」とし、説明変数は「面接時と記録時の意識」「経過記録の学習状況」等に設定した。**【②質的研究】**経過記録の課題を見出し、決定木分析で得られた結果を補完することを目的に、2022 年 12 月にオンラインと電話にて、全国調査実施時に協力が得られた 8 名を対象に半構造化面接を行い、MSW 記録の課題に着目し KJ 法により分析した。**【③経過記録分析】**全国調査実施時に 28 名から任意提出された個別面接を記録した 28 票の経過記録をデータ源に、ソーシャルワーク実践過程を網羅している F-SOAIP の 6 つの視点を用いて記載要素を分析し、SOAP、叙述形式、F-SOAIP の経過記録法について比較検討を行った。

研究 2 アクションリサーチ（以下、AR）：研究 1 で得られた知見を踏まえ、リサーチクエストは「F-SOAIP は MSW の実践過程を支える」とし、2022 年 1 月 13 日から 15 日の 3 日間と、2 月 8 日の計 4 日間、同一内容でオンラインによる研修会を実施した。全国調査の際に募った 33 名の MSW を AR 協力者として設定し、F-SOAIP の導入を図った。研修会受講後の AR 協力

者の反応の分析を行うことを目的に、各研修実施後7日以内に「記録の目的と認識」について自記式質問紙調査を実施し、20名より回答を得た(回収率57.1%、有効回答率100%)。同年5月には、F-SOAIP導入による「記録の目的と認識」「実践時の意識」の変化の分析を実施し、29名より回答を得た(回収率87.8%、有効回答率100%)。分析にはWilcoxonの符号順位検定($p<.05$)を用いた。加えて、「F-SOAIP導入後の変化や気づき」に関する自由記述をKJ法により縮約した。

4. 倫理上の配慮

国際医療福祉大学の倫理審査委員会の承認を得た(承認番号21-Ig-59)。

5. 結果

先行研究レビュー:クライアントとMSWの相互作用を反映した経過記録のあり方、電子カルテシステムにおけるMSW記録の課題や経過記録法の模索、記録の標準化の指摘、面接時と記録時におけるアセスメント実践の関連性の指摘、社会福祉士養成課程の記録教育の課題が指摘されている一方、MSW領域を対象とした経過記録法毎の課題分析、及び使用する経過記録法がMSW実践に与える影響を明らかにした調査は実施されていなかった。

研究1-①:経過記録法の統一状況が面接時と記録時の「ケアと利用者の相互関係」の意識を高めることに影響を与えていた。また、経過記録法の形式により、面接時と記録時のアセスメントの意識に差が生じていた。そして、経過記録法は面接時や記録時のMSWの意識や組織環境により左右されていた。社会福祉士養成課程において、SOAPで経過記録を書く経験を有する者の面接時のアセスメントの意識が高かった。また、SOAP、叙述形式ではMSW実践が十分に明記できていないと認識し、経過記録の学習経験がなくSOAPを使用する者は、ソーシャルワーク実践を反映した経過記録が書けていないと認識していた。この背景には、不明確な経過記録作成ルール故に、MSWが実践の言語化に困難感を抱えている実態があった。

研究1-②:「不明確な記録作成ルール」「不十分な経過記録教育」「MSW毎の経過記録の質の差」「MSW実践の言語化困難感」「経過記録(法)への低い関心」「なおざりにされるアセスメント」が課題として縮約された。

研究1-③:いずれの経過記録法においても、MSW自身が思考した内容が明記されていない傾向が認められたが、特にこの特徴は叙述形式で顕著であった。面接場面の概略を表す「小見出し」はF-SOAIPにのみ記載が認められ、見読性が高かった。

研究2:「記録の目的と認識」の変化で各時点共に有意差が認められた項目は「記録を書くことはMSWの専門性向上につながる」であった。F-SOAIP導入による「実践時の意識の変化」では、面接時では「支援の根拠」が、記録時は「支援の根拠」「利用者の生活歴や人生」「利用者の人間関係」「利用者の強み」に有意差が認められた。KJ法を用いて自由記述のF-SOAIP導入後の変化について分析したところ、「介入明記の利点実感」「記録の質向上」「MSWの専門性理解促進」「根拠に基づく実践意識向上」「実践の質向上」「記録と実践の連動意識醸成」に縮約された。

6. 考察

F-SOAIPは経過記録に書くべき要素をMSWに意識させるが、その意識は面接時にも及ぶことが【研究2】のARより明らかになった。F-SOAIP導入後、「記録時の支援の根拠」に加え「面接時の支援の根拠」に有意差が認められたことから、F-SOAIPの各項目は面接時にクライアントを観察し、アセスメントを行い、介入につなげようとするMSWの意識を喚起させると考える。記録時に「利用者の生活歴や人生」「利用者の人間関係」を把握しようとする意識に有意差が認められた。「A」「I」の明記が要求されることにより根拠ある実践の意識が喚起され、クライアントと環境から得られる情報をより捉えようとする意識の向上という好循環に繋がっている。

経過記録の分析では、SOAPや叙述形式にはアセスメントや支援計画が明記されない傾向が認められた。しかし、F-SOAIPはアセスメントと今後の支援計画を記載するまでの一連の思考を面接中からMSWに意識させ記載も求めることで、ソーシャルワーク実践過程を意識させる。加えて【研究2】のKJ法による分析結果からは、「I」が設けられたことでMSWとクライアントとの相互作用を経過記録に記すことが可能になり、経過記録を基に多職種がMSWの専門性をより理解することにつながるとMSWが捉えていることが明らかになった。介入内容が明記できることの意義は大きい。そして、問題指向に限らない「F」の導入によりストレンクス視点が提示しやすくなり、MSWの専門性向上やクライアントを全人的に把握しようとする意識の向上が図られる。

7. 結論

結論として、経過記録法の違いによりソーシャルワーク実践は影響を受けること、クライアントの問題点に限定しない「F」の導入により、MSWによるストレンクス視点が焦点化できること、F-SOAIPはソーシャルワーク実践に即しているという3点が確認でき、F-SOAIPがMSWのソーシャルワーク実践過程を支える経過記録法として適していると考えられる。尚、本研究は1年以内を目途に書籍化予定である。

【文献】

1) 岡村重夫. ケースワーク記録法—その原則と応用. 東京: 誠信書房, 1965